

やまとの名品 天理図書館



げんじものかり いけだほん
源氏物語 池田本 (重要文化財)

52巻49冊

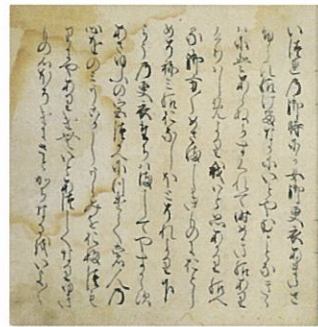
鎌倉末期写

縦16.5cm 横16.0cm

日本の古典籍は、印刷文化が発達するまで、人の手で書き写された「写本」によって伝えられてきた。平安中期に成立した『源氏物語』全五十四巻も、多くの写本が残されている。しかし平安期の伝本は確認されておらず、今は鎌倉期のものが最古の写しとなっている。これらは、長い伝来の間にいくつかの巻、あるいは多くを散逸して、一巻一冊といった形で伝わっているものが多い。

こうした写本は、書き写されるがゆえに、伝わるうちに内容に違いが生じることが間々あり、作品によっては、いくつかの系統に分類されている。『源氏物語』の場合は、藤原定家が校訂した定家本系統（いわゆる青表紙本）と源親行等校訂の河内本系統に大別され、それ以外は別本と総称されている。

旧蔵者池田亀鑑にちなんで「池田本」と呼称される本書は、花散里・柏木の二巻を欠いて全五十二巻四十九冊。このうち後からの取り合わせである四巻四冊を除いた四十八巻が鎌倉末期成立当初の揃い本である。この揃い本の数は鎌倉期の源氏写本の中では最も多い。そして、四十八巻の本文のすべてが定家本



で揃っている。これは定家本鎌倉写本において他に例がない。またこの四十八巻は筆跡がほぼ二種類（二筆）に集約され、うちの一筆は三十六巻におよび、むらなく一定の調子で筆写されている。これは書写の底本が揃いの源氏写本である可能性も示しており、鎌倉末期より古い揃い本の本文を探ることができる可能性を秘めている。今後の『源氏物語』本文研究に大きな役割を果たす伝本である。

（天理図書館 西口尚子）